

第 8 回青森県民駅伝競走大会レースの概要

第 8 回青森県民駅伝競走大会が 9 月 3 日（日）、青森市内で開催され、県内全市町村の代表選手 670 人が郷土の榮譽をかけて 10 区間、42.195 キロをタスキをつないだ。

県民駅伝競走大会は、これまで敬老の日で開催してきたが、敬老の日は老人と触れ合う意義のある日で、各市町村ごとの関連行事も多く選手派遣に支障を来すなどの理由から、昨年の実行委員会総会の議決を経て本大会から 9 月第 1 日曜日に変更しての開催となった。

開会式は、午前 10 時から県営スケート場で行われ、前回村の部で優勝した六ヶ所村を代表して中岫賢悟選手（村役場）が「二十世紀最後の大会に出場できる喜びを胸に、郷土の榮譽とスポーツの栄光を 1 本のタスキにたくし、カー杯走ります。」と気持ちのこもった選手宣誓を行った。

大会当日は、あいにく前夜から降り続く雨の影響を受けて、コースの一部が浸水するなど、コース条件があまり良くなく、天候の如何によっては大会開催が危ぶまれたが、大会関係者の願いが通じたのか、天気は次第に回復に向い、レース直前にはすっかり雨も上がり、予定通り午後 12 時に号砲を響かせることができた。

序盤は先頭が入れ替わる混戦だったが、4 区で青森市の奈良岡慎哉選手（日体大）が区間新記録の力走でトップを走る東北町の山田秀逸選手（青森原燃クワダセター）をラストスパートで一気に追い抜くと、その後青森市は、以降 8 区までを区間記録の快走で完全な独走態勢を築き、最終 10 区の今穰二（佃中）選手がそのままゴールし、これまでの大会記録〔第 2 回大会：2 時間 10 分 00 秒（八戸市）〕を 2 分以上縮める 2 時間 7 分 43 秒の大会新記録をマークし 4 年連続で市の部優勝を成し遂げた。

町の部では、東北町が序盤から積極的なレース運びを見せ、総合 5 位でタスキをつないだ 2 区の鶴ヶ崎知己選手（東北東中）が快走してトップへ踊り出ると、3 区の野田頭美穂選手（野辺地高）がそのままトップを守りきってタスキをつないだ。

しかし、その後、4 区で青森市にトップは阻まれ、8 区の金田浩季選手（野辺地高）、10 区の荒木俊輔選手（東北中）らが区間記録を出す必死な追い上げを見せたが、最終区へつなぐ時にはすでにトップを走る青森市とは 4 分以上も離され、3 年ぶりの総合優勝は果たせなかったものの、町の部では堂々の 6 年連続 7 度目の優勝に輝いた。

村の部では、1区で南郷村の立桶武彦選手（仙台大）が快調なリードを見せ、5区の竹井秀帆選手（村役場）、6区の谷川孝幸選手（航空自衛隊東北町）、8区の門前寿也選手（光星学院高）が区間賞の力走で、順調にタスキをつなぎ、村の部優勝過去6回の強豪六ヶ所村に一度もリードを奪われることなく最終ランナーへとタスキをつないだ。

南郷村アンカーの襲主佳佑選手（田代中）は、プレッシャーで何度も後ろを振り返ったと言うものの、2位の六ヶ所村の追い上げを見事振り切り、念願の村の部初優勝の栄冠をつかんだ。

本大会での上位チームの変動を見比べると、レース前半で多少の入れ替わりはあったが、後半は、順位不動のままゴールし、選手層の厚さが勝敗を決める結果となった。

ただ、忘れてはならないのは選手の発掘に苦労している市町村が大方であるにもかかわらず、これまで全市町村が欠けることなく本大会に参加してくれているということであり、競技の一面だけにとらわれず地域の団結心や郷土愛を育むという意味ではあらゆる場面でそれぞれのドラマがあったことと思う。あらためて市町村関係各位に対し敬意と感謝の意を表して大会概要の結びとしたい。